

# ふるさとの 史 跡

## ● 暗越奈良街道にそって

区内をほぼ東西に走る旧街道として、江戸時代から有名であった暗越奈良街道は、いつ頃から開けた道が詳しくはわかりませんが、およそ4～500年前から、摂津・河内・大和の村落を結ぶ重要な道として既に開発されていたことが大坂冬の陣の各大名軍団配置図によってもそれを知ることができます。

この暗越奈良街道が開けていなかったその昔、難波から大和へ行くには、日本最古の国道といわれる竹内街道が利用され、また、日下の直越なども万葉集にみられます。この暗越奈良街道は、生駒山の暗峠を越えて奈良に至る最短コースであったところからその名が起りました。

大阪高麗橋を起点として旧市内から玉造へ、更に玉津橋を渡り右手にくねくねと曲がりながら東成警察署前～大今里～深江～河内を経て奈良に入ったのです。江戸中期からお伊勢参りが全国的に盛んとなり、この道はこれらの旅人で溢れんばかりに賑わったことが想像できます。

この街道沿いの名所旧跡にスポットをあててみましょう。

まず西から二軒茶屋と石橋があります。春の訪れとともに他国からの伊勢参りの旅人は、淀川の八軒家（現松坂屋南）で船から降り、1泊したのち朝一番発ちで、内安堂寺橋筋から玉造に着きます。当時の玉造は旧市街のはずれで、旅人はここで旅装を整え、家族友人らの見送りを受けて、ヤットコセー、ヨーイヤナーと賑やかに伊勢音頭を唄いながら東へ向かったもので、これら旅人たちの休息所として、鶴屋・柳屋という二軒の茶屋があったところから二軒茶屋の名称が生まれました。

ちょうど二軒茶屋の傍らを流れる猫間川には、慶安3年（1650）幕命により架けられた大坂市中



二軒茶屋・石橋旧跡碑

では最初の石造橋があり、正式には黒門橋と呼ばれていました。この二軒茶屋・石橋は、古典落語にも登場し、広く世に知れわたりました。

現在玉造駅東の路上に玉造名所・二軒茶屋石橋旧跡の碑が建っており、大阪市の顕彰史跡に指定されています。黒門橋は、その昔大坂城の玉造門がこの付近にあり、それが黒かったことから黒門の名がつけられたとのことで、この黒門は天王寺の一心寺の寺門として移築されたと伝えられています。

さて、二軒茶屋を出発した旅人は、中道村を通って平野川に架かる玉津橋を渡って本庄村に入り、大今里から深江に入ったのですが、この平野川は大変古い川で、別名百濟川とも呼ばれ、しばしば古歌にもよまれています。

現在、中道の八阪神社南鳥居入口に暗越奈良街道距高麗橋元標考里の道標が建っています。これは高麗橋の元標からここが1里（約4 km）にあたることを示しています。

江戸時代の玉津橋付近では、馬をつないで道行く旅人に「馬に乗ってくださいませ」とすすめたと伝えられています。明治末期から大正時代には、この街道に路線馬車が通い、のどかな河内平野を瓢箪山まで往復していました。

「暗越奈良街道距離標」の道標



大今里西1丁目の街道の曲がり角に常善寺左へ三丁と記された道標があります。これは江戸時代に大阪の芝居興業と深いかかわりをもつ西今里村の常善寺への道が示されたものです。

東成警察署前の旧街道を曲がりくねりながら大今里村に入ると旧街道の面影をよくとどめています。この旧大今里村の氏神熊野大神宮の隣にある妙法寺は、近世国学の祖といわれる契沖が、延宝7年(1679)から元禄3年(1690)までの11年間住職として滞在し、また修学の道場として有名であり、昭和24年に大阪府顕彰史跡に指定されました。契沖は在寺中に水戸光圀公の懇嘆により、有名な「萬葉代匠記・総釈」の大著をはじめ、多くの著作を残されましたが、元禄3年1月に母堂を亡くされると、天王寺区の円珠庵に隠棲し、同14年(1701)1月25日、62歳の生涯を終えました。現在、妙法寺境内に契沖阿闍梨供養塔と、契沖慈母の墓が残っています。

旧街道と枚岡線の交差するところに左いせ・ならと記された、上部を4角にくりぬいて尖袋とし、上に笠を乗せた珍しい形の道標があります。文化3年(1806)に建てられ、夜間明かりを入れて旅人の便をはかったものです。

“大坂はなれてはや玉造、笠を買うなら深江が名所、ヤットコセー、ヨーイヤナー”と伊勢音頭に歌われ、広く世に知られた名産深江の菅笠は、近世、伊勢参りが盛んになり、この道路が賑わいをみせて以来、参宮の旅人が皆ここで菅笠を道中用に買い求め、必ず携帯する習慣となりました。そのむかし、笠縫氏という一族が、大和笠縫邑から笠の材料である菅が難波入江の沼沢に多く繁茂するところから、集団移住したと伝えられ、古歌にうたわれている笠縫島は、この深江付近と伝えられています。万葉集に「押し照るや難波菅笠置きふるし、後は誰か着ん笠ならなくに」「四極山うち越しみれば笠縫の、島こぎかくる棚なし小舟」とよまれています。

菅笠は、歴代天皇のご即位式や伊勢神宮の20年に1度の式年遷宮に献納されるのを例とし、直径2mにもおよぶ大菅笠が調製され、その技術を地元の方々により保存伝承され今日に至っています。深江稻荷神社一帯が、「笠縫邑跡」として大

「常善寺左へ三丁」と記された道標





契沖史跡・妙法寺



旧街道の面影(大今里3丁目)



契沖阿闍梨供養塔



笠を乗せた珍しい形の道標(笠とろうす)





「深江菅笠ゆかりの地」と「笠縫邑跡」碑

版府の史跡に、また、「深江菅笠ゆかりの地」として大阪市史跡に指定されています。

この稻荷神社の西側に法明寺ほうめいじがあります。境内に雁塚かりづかと呼ばれる2基の石塔があり、1基は弘長2年(1262)他の1基は延元4年(1339)と記された石塔です。この石塔には、次のような伝説があります。

「その昔、清原行部丞正次きよはらゆきぶのちやうまさだという弓の名手がある冬の日にか来を伴って狩りに出かけましたが、その日は1羽も獲物がとれません。夕方、帰りがけに一群の雁にであったので、先頭の1羽を射落としました。すると、どうしたことがその雁の頭がありません。その周辺を探しましたが見つからず、そのまま帰りました。次の冬に狩りに出て1羽の雌の雁を射ち落としました。すると不思議なことに、羽の下から乾いた雄の雁の頭が出てきました。」この話を聞かされた徳の高い法明上人ほうめいじゆうじんは、雁の夫婦愛にうたれ、その冥福を祈るために四重の石塔を建立されたのが「雁塚」であると伝えられています。

この法明寺への道しるべとして、旧深江の新家という所のお地蔵さんに江戸時代の道標が建っています。



法明寺の「雁塚」



法明寺への道標

## ●平野川と玉津橋

東成区の歴史文化を語るとき、東西に走る暗越奈良街道とともに南北に流れる平野川・猫間川の歴史を忘れることはできません。街道は大坂の東の玄関口玉造の二軒茶屋を起点として猫間川に架かる黒門橋（通称石橋）を渡り、しばらく行くと玉津橋に至り平野川を渡ることになります。

黒門橋は大正13年(1924)に撤去され、猫間川も埋立てられて今ではその面影を見ることはできません。

平野川と暗越奈良街道とが交差する玉津橋は、交通の要所として賑わっていました。

「津」と言う字は、港を意味しますが、船着場もあり、玉造の港ということから玉津橋の名称が生まれたのではないかと思います。玉津橋は昭和61年(1986)12月に架け替えられ、歴史の橋として江戸時代の絵地図「増修改正摂州大坂地図＝文化2年(1805)」をエッチングしたパネル6枚が欄干に取り付けられ、歩道部分も暗峠につながる雰囲気を出すために石畳風に仕上げられています。

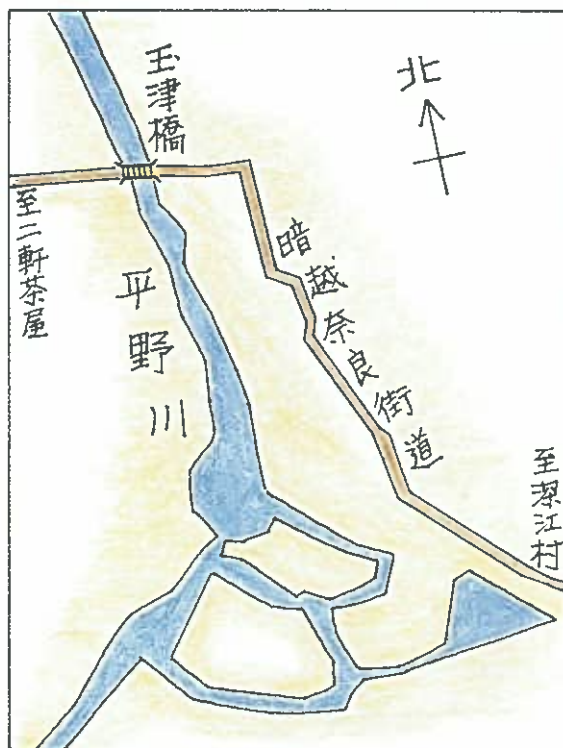
平野川は、寛永13年(1626)頃から、柏原舟が河内の柏原と大坂の八軒家の間を輸送水路として

利用し、最盛期には70艘の柏原舟が上り下りしたと言われています。一方、大坂市中は、運河の開削や河川の整備が行われ、水運が発達し、「人云う、天下の貨七分は浪華にあり、浪華の貨七分は舟中にあり」と言われるほどで、輸送の主役は上荷舟・茶舟で営業権を独占していました。当時、柏原舟と上荷舟・茶舟との間に水運の競合が激しく、紛争や訴訟が絶えず、柏原舟仲間は中道村に番所を設け、荷物の量などを記録し、訴訟に対応したという記録もあります。

かつての平野川は生野区の「俊徳橋」北辺から東成区の「中本橋」までは極めて曲折して流れ、しばしば氾濫の元になったので大正12年(1923)に直線に改修され、現在の流れに変わりました。

平野川は、奈良朝より平安朝にかけて百済郡が置かれ、その中央を流れていたことから、古名「百済川」と呼ばれていました。また、猫間川の名称の由来についても、一説には百済川に対して高麗川と呼ばれていたのが、訛って猫間川と呼ばれるようになったと言われています。

古代の大坂は、渡来文化の窓口としての役割を果たしながら発展してきました。



明治19年の玉津橋付近図



玉津橋



## ●平野川周辺の旧跡

平野川の上流である現在の生野区桃谷3丁目付近に鶴の橋跡の碑が建っています。日本書紀に「仁徳天皇14年(323年)11月橋を猪飼津に造り、即ち其処を号けて小橋と曰う」と記され、文献上では日本最古の橋といえます。この地方にはたくさん鶴が群生していましたので鶴の橋と呼ばれるようになり、この橋の下流の現東成区東小橋3丁目のところに亀の橋跡の碑が建っています。これは後世、鶴に対して縁起のよい亀が名付けられたものと想像されます。



亀の橋の碑

また同じ東小橋3丁目に胸衣塚と呼ばれる塚があります。垂仁天皇2年(前28年)に創建されたとされる比賣許曾神社にまつられている大小橋命の胸衣を納めた塚と伝えられています。後世この塚に植えられた柳の枝が、子供の夜泣き封じに効果があると伝承され、いつのまにかよな塚と呼ばれ、広く世に知られるようになりました。



鶴の橋の碑

胸衣塚



## ●区内の社寺

区内には神社寺院がたくさんあり、それぞれの由緒をもち地域住民に古くから親しまれてきました。ここで江戸時代以前創建のものについて簡単に紹介します。

### ひめこそじんしゃ 比賣許曾神社 = 東小橋3丁目

したてる ひめのみこと  
下照比賣命ほか四柱を奉齋する延喜式内名神大社で、垂仁天皇2年愛久目山に下照比賣命を祀ったのを起源とするたいへん古い社で、推古天皇15年(607)正遷宮の際に天皇の行幸があり、貞観元年(859)神階を従四位に進められた歴史的にも有名な神社です。石山合戦の兵火にあい現在地に移り、旧小橋村の氏神で、多数の文化財を有し、浪速文化の消息を知る貴重なものがあります。

### やさかじんしゃ 八阪神社 = 中道4丁目

すさのみこと  
素戔鳴尊ほか一柱を奉齋する旧中道村の氏神で、藤原道長がこの地に別業(別邸)を設け祀っていたのを、仁安元年(1166)里人が社殿を再興し、天正12年(1584)現在地に移転したと伝え、もと牛頭天王白山権現と称しましたが、明治5年(1872)八阪神社と改称しました。

### はちおうじじんしゃ 八王子神社 = 中本4丁目

はちおうじ おおかみ  
八王子大神ほか四柱を奉齋する旧本庄村の氏神で、応神天皇3年(273)の創建と伝え、孝徳天皇より高麗狗一対の献納があったと伝えられ、八王子稲荷社として、また“樁の宮”として知られました。明治5年(1872)百濟神社と改称、明治42年(1909)旧西今里村の氏神八剣神社を合祀し八王子神社と改めました。

### くまの だいじんぐう 熊野大神宮 = 大今里4丁目

いざなりのみこと  
伊弉册尊ほか二柱を奉齋する旧大今里村の氏神で、用明天皇2年(586)の創建と伝えられます。石山合戦の際、兵火にあいましたが再建され、元和(17世紀前期)以降大坂城代就任と領内巡視の時は、必ず社参することを恒例とした社で、熊野権現と称し、明治5年(1872)に現社号に改め、同44年(1911)旧東今里村氏神八剣神社を合祀しました。

### ふかえいなりにじんしゃ 深江稲荷神社 = 深江南3丁目

うがのみたまのかみ  
宇賀御魂神ほか二柱を奉齋する旧深江村の氏神で、和銅年間(8世紀前期)の創建といわれ、慶長8年(1603)豊臣秀頼が社殿を改造したとも伝えられます。笠縫部との関係が深く、現在境内が「笠縫邑跡」「深江菅笠ゆかりの地」として大阪府、市から史跡に指定されています。

### まほうほうじ 妙法寺(真言宗御室派) = 大今里4丁目

聖徳太子の創建と伝えられ、近世国学の祖と言われる契沖が、延宝7年(1679)から元禄3年(1690)まで住職をし、また、修学の道場としても有名で、現在大阪府顕彰史跡に指定されています。

### ほうみょうじ 法明寺(浄土宗) = 深江南3丁目

ぶんぽう 2 年 (1318) 融通大念仏宗の中興の祖、法明上人の開基で、境内に「雁塚」と呼ばれる二基の石塔があるので有名です。

大今里にある良念寺は天明2年(1782)、観光寺は永徳年間(14世紀後期)、西蓮寺は元禄5年(1692)に創建された融通大念仏宗のお寺です。浄土真宗本願寺派の深江の眞行寺は慶安2年(1649)、東小橋の安楽寺は正徳年間(18世紀前期)の再興です。大谷派の中本の誓立寺は慶長年間(16世紀末～17世紀始め)、中道の浄琳寺は天文5年(1536)の創建、大今里西の常善寺は本門法華宗で、寛延元年(1748)の創建です。



# ふるさとの 文化財

大今里西で発掘された独木舟



## ○大今里西で発掘された<sup>まるきぶね</sup>独木舟

昭和30年、現在の大今里西1丁目で発掘されたもので、出たときの様子からみて遠くから流されて来たものではなく、ここで<sup>くわ</sup>杭につながれたまま使われなくなってしまったものと考えられます。

ここからは独木舟と同時に古墳時代末頃の土器も出ていますので、恐らくこの頃にはかなりの人々が住み始め、集落もでき、魚なども取って暮らしていたものと思われる。

丸木舟は東成区民第一号が乗ったものと言って良いもので、現在は大阪城天守閣に大切に保管されています。

## ○<sup>あけもんさんぞくこうろ</sup>葵紋三足香炉 江戸時代

妙法寺に伝わる大型の香炉、仏前において香を<sup>た</sup>薫くための道具。白い京焼系統の作で正面に三葉葵の紋をつけ、この部分には青いうわぐすり<sup>うわぐすり</sup>が掛けられています。

妙法寺の住職であった<sup>はいちゆう</sup>契沖が、万葉集の注釈書である「<sup>まんようだいしゆう</sup>万葉代匠記」を書きあげ、水戸光圀に差し出したところ、多額のお金とこの香炉が贈られました。契沖はお金はすべて貧しい人々に分けあたえ、寺には香炉だけが残っています。



大今里でみつかったクジラの骨

## ○大今里でみつかったクジラの骨

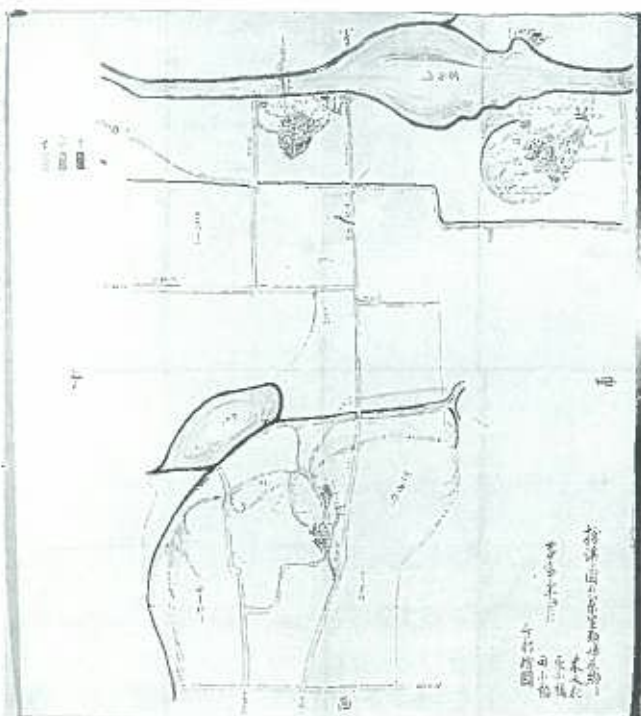
およそ1,600年ほど前の大阪湾は大阪平野に大きく入込んでおり、東成区の大半は入江になっていました。今でも大阪平野の所々で海の証拠となる貝の化石なども発見されています。これは地下鉄千日前線の工事中に発見されたミンククジラの骨で、現在は長居の市立自然史博物館に展示されています。



葵紋三足香炉



摂津国欠東生郡味原郷三村絵図



○摂津国欠東生郡味原郷三村絵図

比賣許曾神社には室町末期から江戸初期にかけての文書や絵図が保存されており、これもその一つ。ただし、慶長年間につくられたものを江戸時代の中頃にもう一度書き写したものと考えられます。東小橋・西小橋・木之村の三村の位置関係や村の社の様子などがわかりますが、百濟川をはじめとする川や池を重点的に記しているため、この地域の水利や治水のために記されたものと思われる。

なお、欠郡というのは旧百濟郡の中世までの俗称で、ここは近世になって東生・住吉の両郡に編入されています。

○曳馬図絵馬

八王子神社の絵馬。日本人は古くから神様は馬に乗って天から降りて来るものと考えていました。したがって、祭りには神馬が献上され、神馬を飼う神社も多かったのです。しかし時代が下るとこの習慣が簡略化され、絵に書いた馬を奉納する風習となり、絵馬のはじまりとなりました。

八王子神社の曳馬図絵馬は立派なケヤキの板に書かれ、画家は不明ですが、筆づかいもしっかりしており、江戸末期の絵馬としては優れた作品の一つにあげられます。

曳馬図絵馬

